

串珠杯及び酒宴記録帖
当館蔵（びいどろ史料庫コレクション）



串珠杯酒宴記録帖
当館蔵（びいどろ史料庫コレクション）

一
品
一
杯
仰

徳、碧金、
静化、應盡、
和戰、深尊。
方乃猶財、
主神。



串珠杯酒宴記録帖
当館蔵 (びいどろ史料庫コレクション)

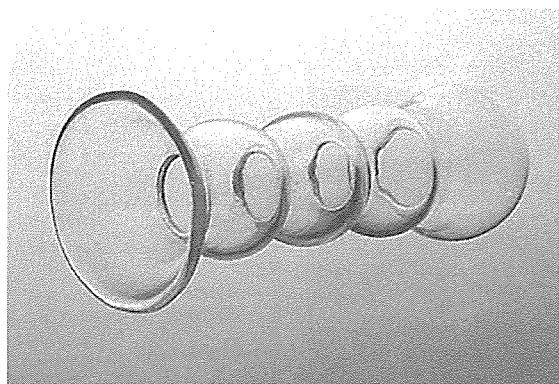


串珠杯酒宴記録帖
当館蔵（びいどろ史料庫コレクション）

【資料紹介】串珠杯の酒宴記録帖について（一）

中山 創太

本稿で採りあげる「串珠杯」は、四つの球体が連なり、その上部にラッパ状の蓋がついた変わった形のガラス製の容器。収納箱の蓋には、墨書で「串珠杯」とある⁽¹⁾。串に刺さった珠を連想して名付けられたのだろう。注がれたお酒を飲み干すまで杯を床に置くことができない「可^べ盃^は」の一つで、弦朝顔ガラス盃などと同様に、酒宴を盛り上げるための趣向が凝らされた酒器の一つである（左図）。本資料は、二〇一一年に神戸市立博物館に寄贈されたびいどろ史料庫コレクションに含まれるもので、既にガラス関連の展覧会などで紹介されてきた⁽²⁾。ところが、串珠杯とともに伝来する四冊の酒宴記録帖（以下、「記録帖」と略称）については、これまで



串珠杯 江戸時代後期

神戸市立博物館蔵(びいどろ史料庫コレクション)

書を揮毫し、小品の画を描いて、ひとときを楽しく過ごす」席書・席画系統の書画会を記録したものの一つといえるかもしねれない⁽³⁾。記録の中には、文字が判読できないほどに乱れたものもあり、その盛況ぶりが生々しく伝わってくる。記録帖は、串珠杯がいつごろ使用されたものなのか、どのような人々に使用されていたかなど、モノそのものからはみえてこない、資料の伝来を知る上で貴重な情報を探しているといえる。

先述の通り、串珠杯とともに残る記録帖は四冊。全て折帖仕立てとなっている。一部前後する時期や重複する時期がみられるものの、概ね時代順に記録がまとまっている。仮に時代順に甲・乙・丙・丁と名称を付して整理すると、以下のようになる。

甲：文化元～明治三年（一八〇四～七〇）

乙：安政四～元治元年（一八五七～六四）

丙：明治一四～三三年（一八八一～一九〇〇）

丁：明治三八～三九年（一九〇五～〇六）

これを信用するならば、およそ一〇〇年間の記録が収められていることになる。もういガラス製の串珠杯が今日まで伝来していることも驚かされる⁽⁴⁾。記録には、酒宴の開催年月日、場所、参会者の名前を確認でき、なかには即興的に揮毫されたと思われる詩書画もみられる。なお、記録の中心は、酒を注いだ串珠杯を何息で飲み干せるかという点で、例えば三回の息継ぎで酒を飲み干した場合は「三吸一杯」、息継ぎ無しで一気に飲み干した場合は「一吸一杯」といった文言が紙幅の多くを占めている。なかには、飲み方につい

て「見事」、「見苦しい」、「鯨飲」などと飲む人の様子を記したもの を確認でき、目を通していると思わずすりとさせられる。

本稿では四冊の内、安政四～元治元年の酒宴が記録された乙巻をみていくことにする。乙巻で注目されるのは、江戸時代後期の豊後出身の儒家・廣瀬旭莊（文化四～文久三年・一八〇七～六三）の名前を確認できることである。彼が参会した酒宴記録を中心に、当時の文化人の交流をみていただきたい。

はじめに、乙巻の概略を確認しておくと、装丁は折帖で、寸法は縦一五・八糀、横八・〇糀、厚一・四糀。見開き二頁を使用した「串珠」（図1）の文字から始まり、安政四～元治元年にかけて催された一一件の酒宴記録が収められている（記録の全文は、巻末を参照）。記録の中心を占める串珠杯を何息で飲むことができたのかという酒興は、「金觀」⁽⁵⁾による序文「五段杯酒令序」から、中国・唐代に起源を持つ「酒令」にちなむものと考えられる。「酒令」とは、「はじめに令官を選び、その命令に従い遊戯を行い、負けた者には酒を飲んだり、歌を歌うなどの罰則が科せられる」もので、酒宴を盛り上げるための遊戯の総称であるという⁽⁶⁾。

乙巻にみられる酒宴の参会者は三五名（複数回名前がみられる人物を含む）。江戸時代末期に刊行されていた人名録などから得られた情報を加えて、まとめたものが表1となる。参会者は、①大坂で活動を行っていた人物、②人名録に儒家、書家、詩家などとして掲載されている文化人、③廣瀬旭莊を中心に、彼と交遊を持った人物が含まれることなどが特徴として挙げられよう。

ここで、旭莊の名がみられる安政五年（一八五八）六月下浣に「伊亭」で行われた酒宴を探りあげてみたい。旭莊の日記『日間瑣事備忘』（以下、『備忘』と略称）同年六月一〇日の項に、同じく参会者の一人である高木侗山から旭莊に酒宴の開筵を呼びかけ、同月二六日に実際に宴が催されたと記されている。宴は「皆裸裎或臥此晚飲」と、皆が裸裎（身をあらわにすること）になるまでの盛況ぶりであつたことがうかがえる⁽⁷⁾。日記中に「伊勢伊亭主人」とあるが、「伊亭」については、どのような人物かはわからない。

なお、旭莊は、同月二八日（戊午季夏念八日宴）の酒宴にも参会している⁽⁸⁾。「備忘」で同日の項をみると、雨が降るなか、覗川（現在の大阪市北区から福島区に存在した曾根崎川の別称）に船を浮かべ、橋下で酒宴を開いたようである⁽⁹⁾。ただ、旭莊は二六日の酒宴記録に「百吸一段」（百の息を吸って、一段を飲む）とあるように下戸であつたようである。ところが、二八日の酒宴記録には「無息五段」（息継ぎせずに五段を飲む）とある。旭莊はこの酒宴で揮毫した「串珠杯詩」において、邴原、焦遂⁽¹⁰⁾など、中国の酒客にまつわるエピソードを交えながら、「奇策」を練つて杯の中身を酒ではなく「沙糖水」（砂糖水）に入れ替えていたことを詩中で明かしている。機知に富む旭莊の対応が微笑ましい。

なお、両日の他の参会者を確認しておくと、五十川金雪（文化五～文久元年・一八〇八～六一）、阪上九山（文化七～慶応三年・一八一〇～六七）⁽¹¹⁾、行徳玉江（文政一～明治三四四年・一八二八～一九〇一）、高安丹山（天保八～明治三九年・一八三七

（一九〇六）、高木侗山、愛田愛軒の六名がみられる。愛田愛軒については、素性を明らかにすることができなかつたが、他の五名については旭莊との交流を持った人々であり、『備忘』にもその名前が散見される（高木侗山については後述）。

金雪は、名を緒、字を世隆、号を金雪又は石顛、通称七五郎。「中島」に住み、人名録には「書家部」（『浪華名流記』弘化二年版）、「聞人部」（『浪華名流記』安政三年版）の項に掲載されている。『大阪人物誌』の金雪の項には「性酒を嗜むと物にも拘泥せず往々奇行あり」と紹介されており、管宗次氏は酒興にのつて詠じた金雪の詩文を提示されている⁽¹²⁾。

九山は、名を弘祖、字を大業、号を九山、通称甚右衛門。南久宝寺坊に住み、中島棕隱（安永九～安政二年・一七七九～一八五五）に詩及び書を学んだという。『浪華名流記』（弘化二年版）には「書家」、「浪華風流月旦評名橋長録」（嘉永六年版）には「詩」、「浪華名流記」（安政三年版）には「聞人部」などに列せられている。

玉江は、名を直貫又は貫、字を仁卿、通称元慎。号は玉江の他、檜園、九柳十橋逸史などがある。行徳家は代々で眼科医を生業としていた。

玉江の父・荔園^{（りえん）}は、篠崎小竹、小竹の娘婿の後藤松陰などと交遊を持っていたとされ、玉江は天保八年（一八三七）に篠崎小竹へ入門。また、旭莊が来坂した際には、荔園に連れられ面会し、その後は詩文や学問を学んだという⁽¹³⁾。『浪華名流記』（弘化二年版・安政三年版）には「画家部」に配されているが、同書（安政三年版）には篆刻も善くしたとある。

丹山は適塾門下生の「姓名録」にその名を確認でき、安政三年（一八六五）に適塾へ入門したとされる⁽¹⁴⁾。幼名を季四郎、のちに丹山、道純と称したという。大坂・今橋の儒家・香川琴橋の四男として生を受け、一五才の時に瓦町の医師高安杏山の養子となり医業の道に進んだという⁽¹⁵⁾。

「戊午季夏念八日宴」の参会者である香坡は、儒家、詩家として人名録に載る橋本香坡（文化六～慶應元年・一八〇九～六五）である。名を通、字は大路、通称半助。静庵、毛山人、戴益子などと号した。上野国沼田出身で、一五歳の時に大坂堀川の蔵屋敷に移ったという⁽¹⁶⁾。大坂では篠崎小竹に学び、篠門四天王の一人と称された。天保九年（一八三八）、伊丹の明倫堂が設立された際には、初代教頭として漢学・習字・詩作などを教授した。安政四年四月に西遊の途に就くべく教頭を辞した。この香坡の跡を繼いだのが、先述の摩齋である。乙巻には、香坡が描いた笠を被り帶刀する人物がおさめられている（図4）。香坡は安政五年四月に伊丹から大坂に移つており、この酒宴は香坡が来坂して間もない時期に開かれたものといえる。

青霞は『浪華郷友録』（天保八年版）八丁表、「書家」の項目に「藤青霞／本町心斎橋／藤市兵衛」とあるが、断定する資料に乏しい。

「元治元年孟夏初六日」（一八六四年四月六日）の酒宴に参会している上田耕冲（文政二～明治四四年・一八一九～一九一二）⁽¹⁷⁾は、大坂四条派・長山孔寅に師事した絵師である。明治一七年（一八八四）に設立された私立浪華画学校（樋口三郎兵衛校主）では日本画の教

授として教鞭をとつた。耕冲は、串珠杯と戯れる人物を見開きにわたくつて描いている(図10)。串珠杯の飲み口によじ登り、中を覗いている二人の内、一人は今にも中に落ちてしまいそうで、なんとも愛らしい。酒宴の際に揮毫された可能性が高く、素早い筆致ながらも、墨の濃淡を描き分けている。耕冲四〇代半ばの作品とわかる点で貴重な作例といえよう⁽¹⁸⁾。

最後に、乙巻に記される酒宴の記録に最も多く登場する高木侗山について述べておきたい。彼の名を人名録などでは確認できなかつたが、『備忘』の記録から侗山が旭荘と交遊をもつていたことは間違いない。なお、侗山の「高木氏書畫帖」の序文を、旭荘が記しており、その草案が残つてゐる⁽¹⁹⁾。そこには、侗山について「素封家。無他嗜好。獨愛書畫」と記されている。なお、「住福井邑」とあることから、侗山も大坂で活動していた人物であつた可能性が示唆される⁽²⁰⁾。加えて、乙巻の酒宴記録の中に八回も登場すること、酒宴の会主を務めていることからも、少なくとも乙巻に記録がみられる時期の酒宴記録の所有者は、「高木侗山」であつたといえよう。

ここまで、串珠杯とともに伝わる乙巻に收められた酒宴記録について考察してきた。酒宴の参会者について、全ての人物を明らかにすることは、筆者の力不足のために叶わなかつた。しかし、「」⁽¹⁾一部ではあるが、乙巻から見えてきた串珠杯の伝来についてまとめおきたい。まず、乙巻が作成された安政四～元治元年の間、串珠杯の所有者は「福井村」の高木侗山であつた可能性が高く、酒宴には大坂で活動していいた人々が参会していいたことが明らかとなつた。とりわけ、記録から

は旭荘を中心に、彼の門弟を含めた交遊関係が垣間見えた。旭荘は詩集『梅墩詩鈔』(嘉永元年・一八四八)以後、その評判が高まり、彼のもとには多くの門弟が集つたという。記録帖をみてみると、彼らは教養を身に付けるとともに、酒宴に興じることでより心を通わせ、交遊を深めていたように感じられる。そのような点からも、串珠杯の酒宴記録帖は江戸時代末期における文化人の交流の一端を語る資料として貴重なものといえるのではないだろうか。

(1) 折帖の記録の中には「串珠杯」の他に「五段杯」の名称を付されている場合もある。本稿では箱書の記載に従うものとする。

(2) 神戸市立博物館編集『びいどろ・ぎやまん展—清涼な異国趣味—』(神戸市健康教育公社、一九八三)、神戸市立博物館編集・発行『びいどろ・ぎやまん・ガラス』(二〇〇〇)。びいどろ史料庫の旧蔵番号は一九六〇・〇〇一。

(3) 摂斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』(吉川弘文館、二〇〇九)、一八三頁から引用。

(4) 神戸松蔭女子学院大学名誉教授・棚橋淳二先生は、串珠杯のガラス素材は当時日本で製作されていた鉛ガラスの比重値に比べて $2 \cdot 4^9$ と低く、ガラスの融剤に硼砂が使用された硼硅酸ガラスであるという。それを踏まえて、串珠杯は中国からの輸入品、あるいは日本製のガラスであつたとしても、当時使用していたものが破損し、明治時代以降に作り直された可能性があるとご教示いただいた。

(5) 「金觀」とは、金本磨^{かなもとまき}斎(文政一二～明治四年・一八二九～七一)と考えられる。摩斎は名を相観、字を善郷、通称顕藏。出雲国神門郡高松村の神官の出身で、大坂に出て篠崎小竹の塾に通い、漢学を修めた。安

政四年には、伊丹の明倫堂の二代教頭を務めている。伊丹市史編纂委員会編集『伊丹市史』第六巻(伊丹市、一九七〇)、一一四～二八頁。

(6) 鈴木靖「酒令」(尾崎雄二郎・竺沙雅章・戸川芳郎編集代表『中国文化史大典』、大修館書店、二〇一三)、五五六頁。

(7) 廣瀬旭莊全集編集委員會『廣瀬旭莊全集』日記篇七(思文閣出版、一九八六)八一頁及び九一頁。六月一〇日の項には以下のようにある。

高木侗山一通送上乞覽願報可否侗山柬曰聞旭莊夫子歸夫子■許下僕廁十一吟社中矣、僕欲以本月天神祭後一日開筵伊亭以會社友兄請為僕先客夫子■曰乃答產物感謝感謝侗山件與同社謀而報餘持趨○柬十一吟社諸子曰侗山欲以本月廿六日會于伊勢伊亭宿題夏日早起請會日過敝廬同住柬以小扁

(8) 乙卷に収載される「串珠杯詩」の草案と考えられる漢詩が『梅墩剩稿』(写本一冊)、『詩文未定稿』(写本一冊)にみられるという。乙卷収載分とそれらには相違が見られるため、廣瀬旭莊全集編集委員會『廣瀬旭莊全集』詩文篇(思文閣出版、二〇一〇)、五九九頁から以下に全文を転載する。なお、()内は筆者による書き下しである。

串珠杯詩 戲為高侗山賦
其形五層似串珠、每層容三合餘

(其の形は五層にて、串珠に似る、毎層三合余り容る)

疑是象罔所探獲、飲中八仙識此無

(疑ふらくは是れ象罔を探獲する所、飲中八仙の此識る無し)

高館張筵夜將半、四座皆是高陽徒

(高館に筵を張り、夜将に半ばにならんとす、四座皆是れ高陽の徒)

五斗不復推焦遂、淋漓何辭到首濡

(五斗焦遂を推し量らず、淋漓何んぞ首濡に到らんとす)

美酒盛來珠光發、華燈影透燦燦乎

(美酒を盛れば珠光を發し、華燈影燦燦と透かす)

一吸五層齋搖動、前珠後珠相逐徂

(一吸にして五層搖動を齋し、前珠後珠は相逐に徂く)

唯疑隋珠在蛇口、泡泡起滅鬱沸如

(唯隨珠蛇口に在り、泡が起ちは滅するは鬱沸の如し)

一洗金谷陳腐令、遁者將附劉章誅

(一洗金谷、遁れる者は將に劉章の謀を附さんとす)

若不能飲以詩罰、吾人搔頭獨長吁

(若し詩罰を以て飲む能はざれば、吾人頭を搔きて独り長吁す)

酒伯元來兼詩伯、論詩苛酷不赦粗

(酒伯は元來詩伯を兼ね、詩を論ずる苛酷を赦さず)

將飲酒耶我量淺、將作詩耶我腸枯

(將に酒を飲まんとする耶、我が量は浅く、將に詩を作らんする耶、腸枯る)

進退已谷得奇策、一吸五層忽然虛

(進退已に谷は奇策を得、一吸五層忽然として虛し)

誰圖內有沙糖水、四座相視各胡盧

(誰が図りて内に沙糖水が有るうか、四座各胡盧を相視る)

(9) 『備忘』には、同日の酒宴について以下のようにある。

(前略)：移酒具上舟初約橋下納涼以雨中無所見入覗川水晚漲舟觸左岸
將覆舟子墮棹田旋久之下二丁出入廣木亭侗山為主召妓■輩行酒予不堪飲
乃託欲眠臥於別室■(得カ)一絕：(中略)：後席衆問何為乃所作侗山
悅命主婦買紙乃揮灑(後略)

(10) 那原は中國後漢の学者。酒を好み一晩中飲み明かしても酔うこととはなかつたとされる。焦遂は、唐時代を代表する八人の酒豪とされる「飲中

八仙」の一人。普段は円滑に話を進められないようであったが、酒を飲むと雄弁になつたとされる人物。

(11) 九山の生没年は、『浪華名流記』(安政3年版)にある「庚午生」から算出した。

(12) 管宗次「五五十川金雪『金雪詩稿』について—安政三年二月廿五日～九月四日—」『京大坂の文人 続々』(和泉書院、二〇〇八)。

(13) 水田紀久「行徳玉江の生涯」(日本書誌学大系43 日本書刻史論考)、青裳堂書店、一九八五)、二八〇～三〇八頁。

(14) 梅溪昇『緒方洪庵と適塾』(大阪大学出版会、一九九六)。

(15) 芝哲生「適塾門下生に関する調査報告(3)」(『適塾』NO. 16、適塾記念会、一九八三)。芝氏によると、丹山は大坂の儒者香川琴橋の四男で、幼名を秀四郎という。一五才の時に医師六代高安杏山の養子となり、丹山と称した。安政三年(一八五六)に適塾に入門、杏山の没後は医業を継いだとされる。

(16) 前掲書5、一一八～一二四頁を参照。

(17) 池田市立歴史民俗資料館編集・発行『日本画家上田耕夫・耕冲・耕甫』

(一九九四)では、耕冲は文政三年生まれの可能性が指摘されている。

(18) 同書には、「耕冲の制作年が明確となつた青年・壯年期の本格的な作品を見出しができていない」とある。耕冲の作品が三〇件程収載されているが、その多くが明治期以降のものであり、江戸期の作品は写生帖などの四件となっている。

(19) 前掲書7、七三〇～三一頁。

(20) 摂津国豊島郡、及び同国島下郡の福井村が候補として挙げられるが、断定することは難しい。

〔付記〕

本稿で利用した人名録『浪華名流記』(弘化二年版、安政三年版)、『浪華郷友録』(天保八年版)、『浪華當時人名録』(嘉永元年版)は、森銑三・中島理寿編『近世人名録集成』第一巻 地域別編(勉誠社、1976)所収版を参考した。

また、記録帖の翻刻、及び読み下しについては当館学芸員小野田一幸氏、高久智広氏、石沢俊氏にご教示いただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

【酒宴記録帖（乙）・安政五年（元治二年）翻刻】

「凡例」

・表記は原文のまま。文中の／は原文の改行位置を示す。また酒宴

／ごとに一行の空白を設けている。

・判読不明箇所は■で表記する。

・（図）は翻刻文の後に、まとめて掲載している。

〔朱文長方印〕「青霞」

（図1）

〔白文方印〕「牧土光」、〔朱文方印〕「天有」

〔朱文長方印〕「古士人」

五段杯酒令亭

終日不醉嘆邴原之健五斗卓／然稱焦逐之豪此持以善飲顯／爾若夫五
段之盃數龠之酒么麼／也滴瀝也皆視以為一鼓舌不／盡耳然其製槩々
逐段漸大以／至于下底又圓而不可豎且酒令禁／飲未盡而息其始飲也
纔濡其／脣而一段且盡二段之儲隨泄忽／然溢而咽于喉然猶可堪而至
三／段四段酒氣已塞于胸頤上隨矣／或嘯或嘔終叩頭而謝於觥錄事／
凡如此者十八九矣儻有一飲盡焉／者數事登姓名於此帖以褒之／者寸
鐵可以煞人則此玄膺滴瀝／亦可以使邴原焦逐之徒不敢称／誰於酒軍
焉豈不愉快哉豈／不愉快哉 安政丁巳臘月 金觀撰〔白文方印〕「觀
字善鄉」、「朱文方印」「生■■■」
(図2) 雲城

【歲在安政五年】戊午夏／六月下浣於伊亭開宴

三吸一盃 五十川金雪

一吸一杯 阪上九山

五吸一杯 行徳玉江

四吸一杯 高安丹山

一吸一盃 高木侗山

三吸二段 愛田愛軒

百吸一段 廣旭叟

（図3）
立入山樵酔筆

戊午季夏／念八日宴

無息五段 旭莊

代酒以沙糖水

酒五吸一杯 香坡

一吸一盃 青霞

一吸一杯 侗山

（図4）

他不擊余々／擊他廟堂／和戰議如何／両刀腰畔徒然／在袖尔春語君

落花 毛山人

〔白文方印〕「芳心自同」

廟堂神策矣雄藩天／下方知

皇 ■（孩力）尊夜國盡忠人競／唱勲功誰餘轉乾坤

侗山人正〔白文方印〕「高士正」、〔朱文方印〕「侗山」

（図5）

夢酌清談／意味深長

鴻雪山人（白朱文聯方印）「鴻」「雪」

戊午仲冬友鹿洞小集

三吸一盃 西尾西陀

二吸一杯 寺川梅汀

一吸一盃 洞山

一吸一杯 霞城

（図6）戊午仲冬寫／石峰画

（図7）
辛酉秋月／寫於友鹿／洞中

鴻雪山人〔白文方印〕「杏華春雨」

串珠杯詩／戲賦
（朱文橢円印）「風月」

其形五層以串／珠每層容酒三／合餘輶是象／罔所樣獲飲中／八儕識
此無／高館張筵夜將／半四座皆是高／陽徒五斗不復／推焦遂淋漓何
／辨到美濡美酒／盛來珠光發華／燈影透燦々乎／一吸五層齎搖動／
前珠後珠相逐徂／慎如隋珠在蛇口／泡々起滅霽沸／如一洗金谷陳腐
／令遁者將附劉章／珠若不能飲以詩／罰吾人搔頭獨長／呼酒伯何料
兼／詩伯論詩精細不／赦粗將飲酒耶／我量淺將作詩／耶我尔枯進退

已／谷酒奇策一吸五／層忽然虛誰図内／有沙糖水四座／相視名胡盧

旭叟〔白文方印〕「廣瀨謙印」、〔白文方印〕「廣瀨吉甫」

巳未正月念九日

無息吸盡者三／蜍友／致軒

無息吸盡者一／霞城／極斎／樂是

■壱珠褒 陸阿龍

咸豐庚申夏六月於友鹿洞

吃下五吞一盃 劉芸齊

喫下一吞九盃 高侗山

仝 高致軒

高致軒

全	高藩婦人 絹	一吸一杯 樹園
全	梶原村婦 濃	一吸一盃 二柳
三呑	長遊	一吸一杯 倉山
		一吸二段 雙石
		餘三段則致軒代吸
壬戌夏四月初七飲于松濤亭西窓之下		
一吸一盃 圓覺寺 一心		
四坐呼妙而不急徐々吸盡可謂古今飲徒英雄矣		
二吸一盃 圓明寺 大量	寒邨春三月十七日	
一吸一盃 玄通寺 靈瑞	三吸一盃 多田宗是	
壬戌秋閏八月旬飲友鹿洞	全 一盃 井隆	
吃下一呑一杯 宗昱	一吸一盃 倉山	
吃下二呑二盃 致軒	全 一盃 霞城	
偏愛白衣酒何嫌青如霜	全 一盃 致軒	
(図8)	[朱文橢円印]「月到天心」	
真(白文聯印)「真」、「浦」	予訪侗山君々命工鑄大礮偶成引予觀之傍置酒各傾串珠杯處飲	
香舟中井隆(白文方印)「吊」、(朱文方印)「喬」	醉餘揮毫寫其意	
(図9)		
〔白文橢円印〕「墨樵」		
青浦生(白文方印)「真印」		
壬戌十月幾望同雙石老人投友鹿洞主置酒		
而一吸飲烏		
一吸一盃 致軒		
文久癸亥春三月欲獻大礮於高楓藩主永井侯命工鑄之名日堅城已成置于我堂上偶中井香舟見過共飲其傍乘興夜其因余錄其銘		
礮兮礮兮聲震海天是膺是懲我城以堅		

洞山高木正「白文方印」「正印」、〔朱文方印〕「式止」

(図10) 耕冲(花押)

元治元年歳在甲子孟夏／初六日

数吸二杯 島本玉麟

一吸一杯 神田二柳

一吸一杯 高木長遊

数吸一杯 奥村熊三

二吸一杯 吉田格褒

二吸二杯 高木致軒／頤下滴淋漓

一吸一杯 上田耕冲

数吸二杯 高木松英

秋爽〔朱文方印〕「爽秋」

(図11)

僕始訪高木氏酒酣／主人出串珠盃使僕飲／六吸而尽一杯致軒君／置左手于座上飲一吸／／杯然滴瀝灑胸襟／洞山君尋置手于膝上飲不見／一滴瀝僕伏其手練

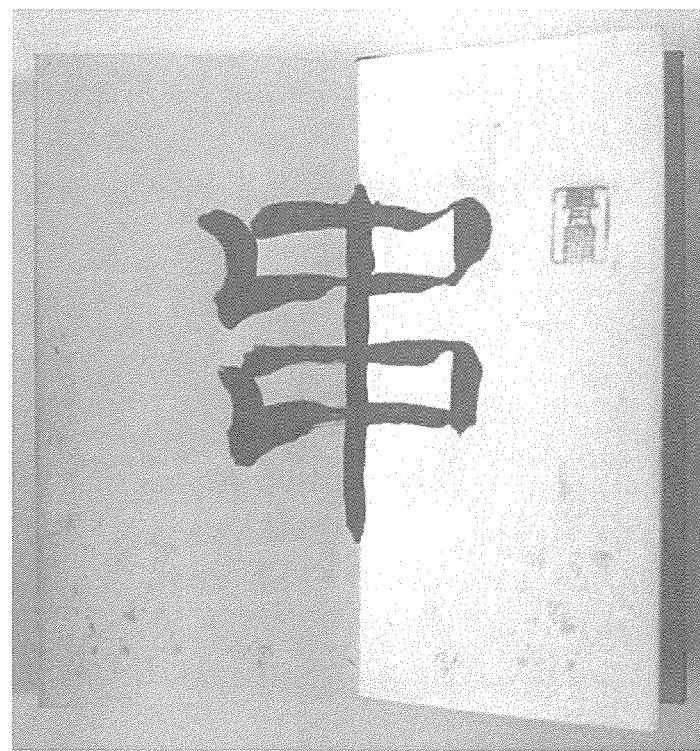
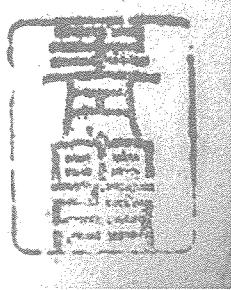
秋爽再題(朱文長方印)「爽秋」

〔白文橢円印〕「採補」

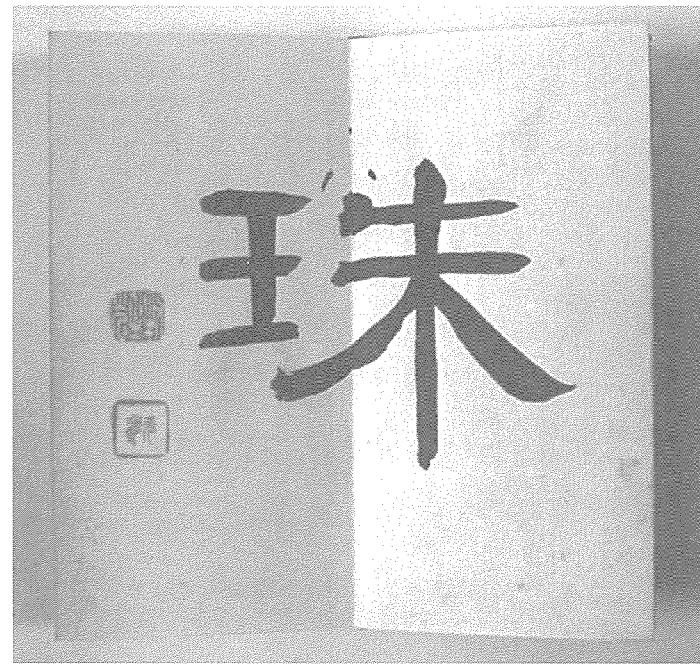
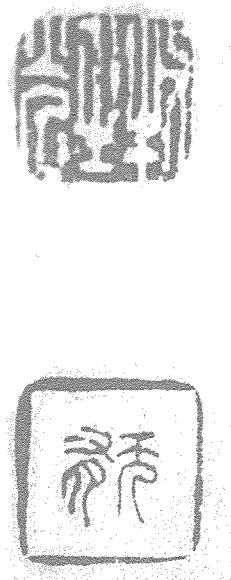
誰所無嗜／再呑酒■／約弄七盤／虛酒荒九山／五段杯

〔白文方印〕「弘祖字大業」、〔朱文方印〕「九山式号柳■」

元治二年 孟夏念六／醉 浚漫題以挨跋



【図1】



(図2)



(図3)



(図4)



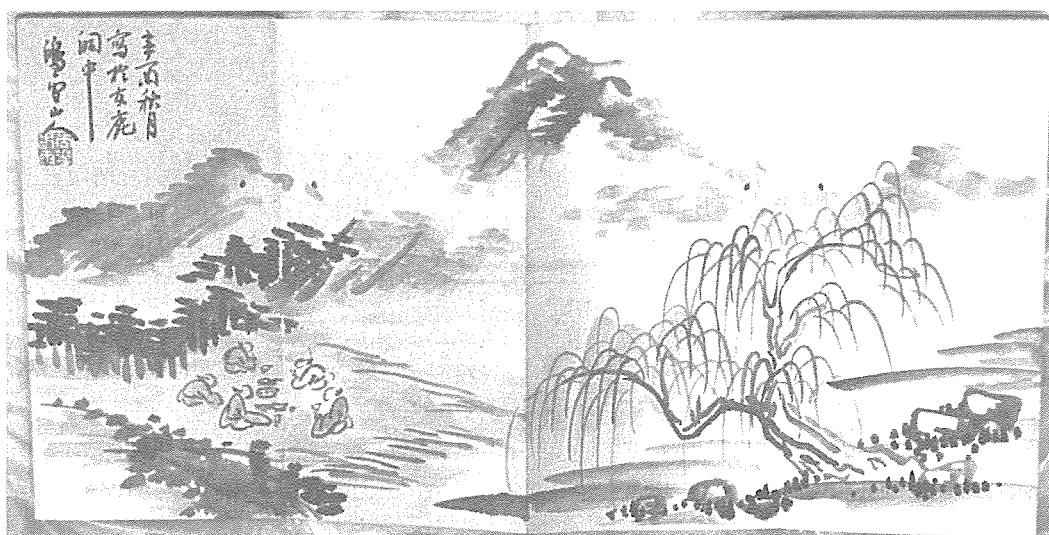
(図5)



(図6)



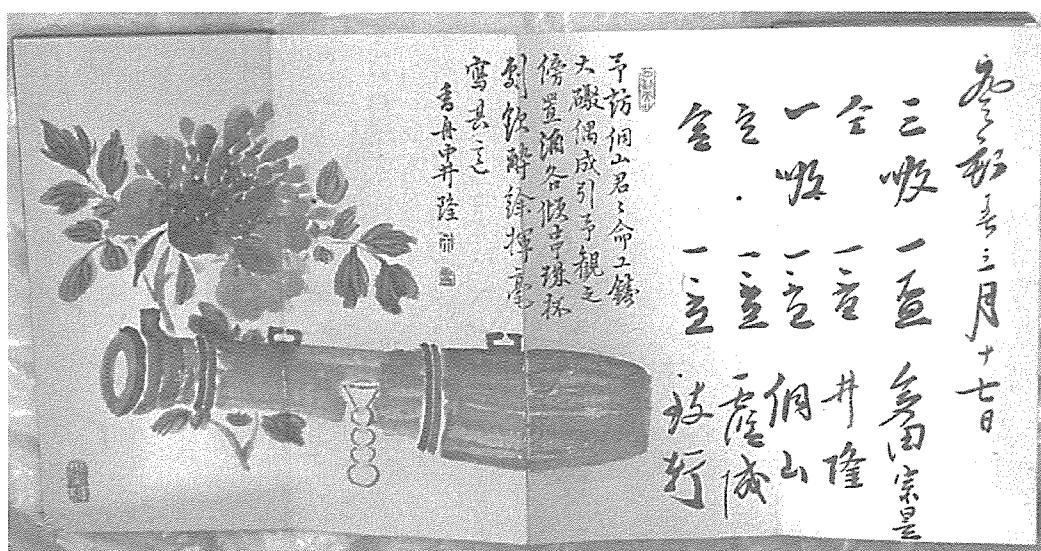
(図7)



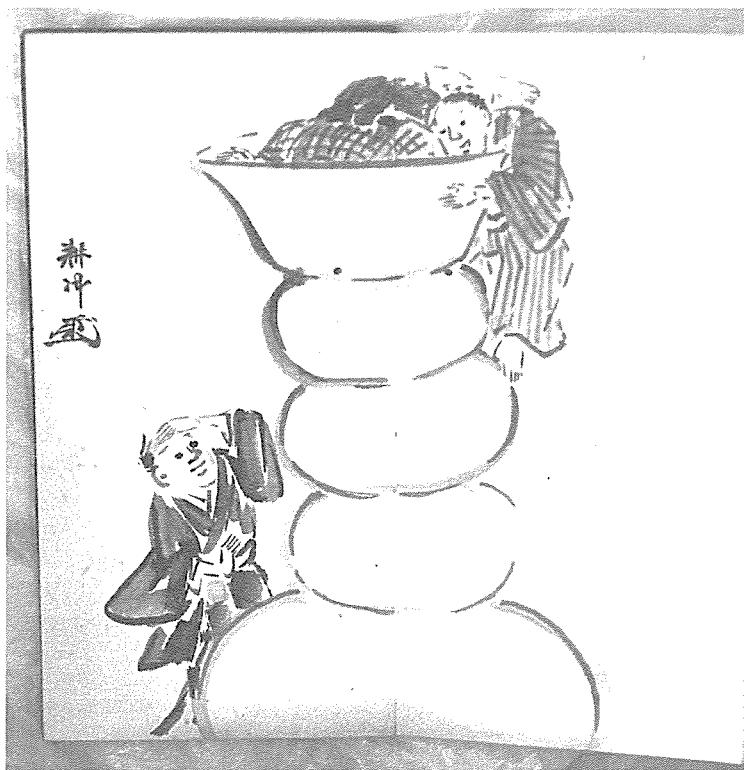
(図8)



(図9)



耕冲圖



(図
10)



(図
11)

表① 乙巻にみられる参会者一覧

		書名	刊行年	丁数	備考
1	金本歎(摩齋)	「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年3月	3ウ	(儒家部) 金本摩齋 名徳字善卿稱頭頤以己丑生出雲人初學藤崎小竹寓御屋街
2	五十川金雪	「浪華樹芳譜」(下巻)	安政4年正月	44ウ	金本歎字善卿稱頭頤出雲人寓御屋街
		「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	16オ	(書家部) 金雪 五十川諸字世隆号石頤脩七五郎館詩住中島街
		「浪華風流月評名機長錄」(嘉永6年版)	嘉永6年		(詩) 中ノシマ 五十川金雪 二十間 上大和様
		「風流巷之譜」			此地ノ産ニテ風流ノ技ニ宏長ンタル者ハ金雪九山防洲介眉藍田春波容耕等、其選ナルヘシ
		「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年3月	19オ	(聞人部) 五十川金雪 雪徳字世隆号石頤脩七五郎以己巳生大阪人學後藤松陰善詩及書住中洲
		「浪華樹芳譜」(下巻)	安政4年正月	43ウ	五十川諸字世隆号金雪又石頤脩七五郎住中州
3	坂上九山	「大阪人物誌」	昭和2年		
		「大漢一覧」	天保5年		九山坂上弘祖 (白文聯印) 「柳」「橋」 大阪市中を描いた鳥瞰図。九山はその箇語を担当している
		「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	16オ	(儒家部) 九山 阪上祖学大業稱甚右衛門兼善詩住南久宝寺坊
		「浪華當時人名錄」	嘉永元年8月	22オ	(文部) 阪上甚右衛門 南久宝寺町三丁目/名弘祐号九山
		「浪華風流月評名機長錄」(嘉永6年版)	嘉永6年		(詩) 南久宝 坂上九山 同(二十間半) 深屋櫻
		「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年3月	19オ	(聞人部) 阪上九山 名祖字大業稱甚右衛門以庚午生大阪人學中嶺鶴善詩及書住南久寶寺坊
4	行徳玉江	「浪華樹芳譜」(下巻)	安政4年正月	34ウ	阪上裕字大業號九山稱甚右衛門住南久宝寺坊
		「風流巷之譜」			此地ノ産ニテ風流ノ技ニ宏長ンタル者ハ金雪九山防洲介眉藍田春波容耕等、其選ナルヘシ 内題に「浪華風流名機長ノ評」とあり
		「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	11ウ	(儒家部) 稲園 行徳貫字公駿禪横元詩住堂島
		「浪華風流月評名機長錄」(嘉永6年版)	嘉永6年		(歌) 堂シマ 行徳玉江 同(十九間) 新天滿櫻
		「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年3月	10ウ	(書家部) 行徳捨園 貞賀字公駿又號玉江禪元横以文政戊子生大阪人尤善花卉頗有済人之風致仍善篆刻住塙
		「安巳新撰文苑人名錄」(安政4年版)	安政4年	43ウ	全(画) 同(大阪) 行徳捨園
5	高安山	「風流巷之譜」			行徳玉江 其父務園号リモ上別スルト、宣ヲ失へり、茲園ハ取ニ轉スヘシ 内題に「浪華風流名機長ノ評」とあり
		「遊塾門下生姓名録」			
		「高木氏苗屋帖序」「梅傲文抄」			
		「愛出雲軒」			
		「浪華當時人名錄」	嘉永元年8月	2オ	(儒家部) 廣瀬謙吉 淡路町御次筋西/名善字梅嶽号旭莊
		「浪華當時人名録」	嘉永元年8月	2ウ	(詩家) 廣瀬謙吉 魏家二出
8	廣瀬旭莊	「浪華風流月評名機長錄」(嘉永6年版)	嘉永6年		(詩) 淡路町 広瀬謙吉 五十二間半 大江橋
		「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年3月	2ウ	(儒家部) 廣瀬旭莊 名模字吉甫稱謙吉一號梅嶽以丁卯生豐後日田人淡窓季弟承家學又龜井昭陽後自立一家言所著有…(中略) …住伏見町
		「浪華樹芳譜」(上巻)	安政4年正月	6ウ	廣瀬謙吉字吉甫號旭莊又模證豐後日田住于淡路所著詩鈔三編行于世
		「安巳新撰文苑人名錄」(安政4年版)	安政4年	65オ	儒大坂廣瀬旭莊
		「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	6オ	(儒家部) 香坡 橋本通字大路稱半助上毛人
		「浪華風流月評名機長錄」(嘉永6年版)	嘉永6年		(詩) 伊丹 橋本香坡 四十五間半 玉江橋 波花ト朝歌スルカラハ、此地ノ間人ハナルタケハ穿■スヘキ、伊丹ヨリ橋本香坡ヲヤドヒ来り 内題に「浪華風流名機長ノ評」とあり
9	香坡	「風流巷之譜」			
10	青霞	「續浪華樹芳譜」(天保8年版)	天保8年	8オ	藤青霞本町心源閣 腹市兵衛
11	西尾西陀	「臼間撰事備忘」	安政6年1月晦日		「不來西に尙山以路隔不能」とあるが、同一人物か不明
12	寺川梅汀				
13	石峰	「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	20ウ	(儒家部) 石峰 小林光宇伯字號激石住天満
		「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年	9ウ	(儒家部) 小林石峰 名光宇伯孚一有天激石之號稻伊兵衛以亨和辛酉生大阪人學嘗於神吉源小後學嘗於阿田半江・木巽處不負才不使氣以開雅所稱住天満第五街
14	餘友				
15	高木致軒				
16	露城	「臼間撰事備忘」			
17	楳齋				
18	東是				
19	窮芸齋				
20	長遊				「高木長遊」と同一人物か
21	鴻雪	「臼間撰事備忘」			
22	高瀧夫人 桂				
23	源原村婦 遼				揖津国島上郡源原村カ
24	廣明寺 大量				
25	玄通寺 簡瑞				現大阪府茨木市の玄通寺の住庵を指すカ
26	宗昱				
27	二柳	「浪華當時人名録」	嘉永元年8月	15ウ	(儒家) 稲田慎吉 信濃橋東詰/名焉号九嶺山根 「神田二柳」と同一人物か
		「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	18ウ	(俳諧部) 二柳 稲田慎新一哥不二萬善雷住信濃坂東
28	雙石	「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年	1オ	(儒家部) 落合雙石
		「安政文苑人名録」(安政7年版)	安政7年		圓雙石/名媛方魚字修水石号影雲/大丸新道/村瀬勘助
		「安政文苑人名録」(文久3年版)	文久3年		圓雙石/名魚水石/与影雲/大丸新道/村瀬勘助
29	多田宗昱				
30	井隆	「浪華名流記」(弘化2年版)	弘化2年	6ウ	(儒家部) 井隆 上田
31	上田耕冲	「浪華風流月評名機長錄」(嘉永6年版)	嘉永6年		(画) 高ライ三 上田耕冲 同(二十一間半) 戎橋
		「浪華名流記」(安政3年版)	安政3年	15オ	(儒家部) 上田耕冲 名及字耕冲号萬次郎以文政庚辰生大阪人其畫精細體肥住松木街
		「浪華樹芳譜」(上巻)	安政4年正月	26オ	上田及字耕冲號耕冲萬次郎住遇唐街 上田氏、名は及、字は耕方、通稱萬次郎、耕冲は其號なり父を上田耕夫と云ふ幼にして畫を擅山川昇の門に學ぶ孔興助となることを肯せず万方同人として互に切磋琢磨し遂に能く一家の風流をなす常に遊歴を好み足跡と海内に遍く尤も山川花鳥に妙を得たり著て其揮せるものを宮内省に献納し又賜を受けて天御神社貢美室の襖に執筆せしことあり男耕用い其業を難せば名声失せせず/ 没年明治四十四年一月廿一日行年九十三歳/ 墓所 大阪市北区上福島中三丁目 妙徳寺
32	島木玉麟				
33	奥村龍三				
34	吉田裕源				
35	高木松英				